

『黒衣聖母』論

金熙照*
khj134@unitel.co.kr

＜目次＞

- | | |
|------------------|---------------|
| 1. はじめに | 3.2 願がけをした祈り |
| 2. 『妙な伝説』のことについて | 4. 稲見家の災難について |
| 3. 祖母の祈りについて | 5. おわりに |
| 3.1 願がけをしない祈り | |

主題語: キリスト教(Christianity)、麻利椰観音(Mriyakannonn)、嘲笑(sneer)、祈り(prayer)、悪意(malice)

1. はじめに

本作品は大正九年五月の雑誌『文章倶楽部』に発表された所謂芥川龍之介の切支丹物に属する短編である。物語は黒檀を刻んだ麻利椰観音にまつわる稲見家の伝説という形で、「私」と「田代君」のやりとりが描かれている。だが、芥川はこの麻利椰観音に「無気味な眼」と「悪意を帯びた嘲笑」と「怪しい表情」といったイメージを吹き込んでいる。特に「無気味」と「悪意を帯びた嘲笑」を繰り返して使って麻利椰観音を「縁起の悪い聖母」と書き上げている。つまり、芥川は物語の中で聖母麻利椰をキリスト教の聖なる存在ではなく、意地悪そうなものとして書き換えているのである。このようなことは、『黒衣聖母』の二カ月後の七月に発表された『南京の基督』(『中央公論』大正九年七月)にも表れている。そこで芥川は酔っぱらって娼婦の部屋に入って来て、宋金花と一夜を過ごし、金花の寝ているところを、お金も払わずに逃げてしまう混血児の不良の男にキリストをだぶらせていた。つまり、『黒衣聖母』では麻利椰観音像に意地悪そうな、『南京の基督』ではキリストに不良男のイメージを与えていたのである。このような芥川のキリストに対する態度は彼の末年の作品に属する『おしの』(大正十二年四月)にもよく表れていた彼は『おしの』ではキリストを「臆病者」として皮肉っていたのである。つまり、彼はキリストを神としてではなく、物語の小道具として

* 朝鮮大学校 日本語科 教授

使っていたことが垣間見られる。本論では『黒衣聖母』を読み直して芥川のキリストに対する思想に迫りたい。

本作品をめぐる従来の論として清水康次は物語のプロローグと結びのところが対照をなしていることを挙げて次のように述べている。

「聖母は黒檀の衣を纏ったまま、やはりその美しい象牙の顔に、ある悪意を帯びた嘲笑を、永久に冷然と湛えている。——」と結ばれている。なお、標題の下に、「この涙の谷に呻き泣きて、御身に願いをかけ奉る。……御身の憐みの御眼をわれらに廻らせ給え。……」という引用があり、激しく対立する。従って作品の意図は、その神の「悪意」・「嘲笑」にあるのか、その意味は未だ分明ではない¹⁾。

西原千博も「最後の一節に注目しよう」といって次のように述べている。

この文の中の特に「永久に」という言葉に注意したい。言うまでもなく(中略)ここでは「像」から「麻利耶」(神)へと変身しているのではないか(中略)それらを通して、単なる「像」に過ぎなかったものを、読者に神として読ませるようにすること、これこそ作者の仕掛けなのである。しかしこのような異化を可能にすることこそ、物語の力なのである²⁾。

また、中田和隆は吉田晴一(『芥川竜之介』三省堂、1942.2.20)の「切支丹の変形だが「超自然現象の物語で力が弱い」海老井英次(『芥川竜之介必携<別冊国文学>』一九七九、二)の「主題を「絶対、永遠とかく彼岸的」なものを人間に従属させたと思った(錯覚した)とき、人間が陥る悲喜劇」という論に触れながら、

芥川の描く「奇蹟」は単なる超自然への怪異趣味ではなく、自身の創作行為にともなう切実な願いともいえよう³⁾。

と述べている。なお、野田康文は「キリスト教の信仰をめぐって」次のように述べている。

限定的な少女の視点と、その外側に立つ、より客観的な視点とを対置させるという手法

1) 清水康次(1985)『芥川竜之介事典』明治書院、p.188

2) 西原千博(2003)『芥川竜之介新辞典』翰林書房、p.204

3) 中田和隆(2000)『芥川竜之介全作品事典』勉誠出版、p.184

は、芥川の、キリスト教を扱った次の作品「南京の基督」(大正九年七月)とも共通している(中略)同時に「神々」という一語からこれがキリスト教とは相容れない異教のものであることを読者に伝えている⁴⁾。

以上、従来の論は主に茂作の死と祖母の死をめぐる論じられていたものであり、物語の最後のところでの聖母の「悪意を帯びた嘲笑」に焦点を当てて論じられていたのである。では、テキストの冒頭から読み直して作者芥川のキリスト教に対する思想を分析して見よう。

2. 「妙な伝説」のことについて

物語は大きく三つの部分からなっている。一つ目には私と「教養に富んだ新思想家」の田代君が登場し、田代君が入手した「妙な伝説が附随している」「麻理耶観音」が示される。二つ目には「麻理耶観音」の伝説が表れている。「麻理耶観音」は新潟県の稲見家にあった「家重代の宗門神」であったが、八歳の茂作が麻疹にかかり、医者の治療を受けても効果はなく、死にかかる容体になる。茂作の祖母は「麻理耶観音」に孫の快癒を祈るが、「私風情の信心には及ばない事」であつたら、「せめて私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし」と祈る。「麻理耶観音」は祖母の祈りを聞き入れて翌日、茂作の病気を治してくれたのである。ところが、茂作の病気が治ると、介抱で疲れ果てていた祖母が死んでしまうのである。なお、祖母が息を引き取った「十分ばかりの内に」茂作も息を引き取ったのである。つまり、茂作の病気は治ったものの、祖母は死んでしまったのであり、病気の治った茂作も祖母の死んだ十分後に死んだのである。茂作が病気から治った期間はたった一日ということになる。でも「麻理耶観音」は祖母の祈りを聞き入れ「命のある間は、茂作を殺さずに置いた」というのである。三つ目では田代君と私が伝説に対する真偽のことをやりとりしながら、「ある悪意を帯びた嘲笑」を浮かべている「麻理耶観音」に不気味さを感じたという。では「麻理耶観音」はどういったものであるか。その姿形が冒頭部に詳しく表われている。普通の観音は白磁のものであるが、当の観音は黒檀のものであると述べている。

4) 野田康文(2002)『芥川竜之介大事典』勉誠出版、p.461

第一これは顔を除いて、他はことごとく黒檀を刻んだ、一尺ばかりの立像である。のみならず頸のまわりへ懸けた十字架形の瓔珞も、金と青貝とを象嵌した、極めて精巧な細工らしい。その上顔は美しい牙彫で、しかも唇には珊瑚のような一点の朱まで加えてある⁵⁾。

『黒衣聖母』

私が最初に見た観音のイメージは「顔は美しい」「極めて精巧な細工」であったのである。私は観音像が美しいが故に当分の間「美しい顔を眺めていた」のである。ところが、その美しさは長くは続かない。

眺めている内に、何か怪しい表情が、象牙の顔のどこかかに、漂っているような心もちがした。いや、怪しいと云ったのでは物足りない。私にはその顔全体が、ある悪意を帯びた嘲笑を漲らしているような気さえたのである。

『黒衣聖母』

観音像には「怪しい」ところがあり、「悪意」と「嘲笑」が見え隠れしたのである。さらには「不気味なところ」もあったという。つまり、普通の観音像には慈愛あるマリアの表情があるのに、この観音像には美しいところはあるが、慈愛という表情が欠けているということである。慈愛がないばかりではなく、「禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍とする、縁起の悪い聖母だと云う」のである。田代君は実際そういうことが起こった「妙な伝説」もあると話しながら「陰鬱な眼つきにな」ったという。また、田代君の「妙な伝説」という言葉を聞かされた私も「我知らず怪しい声」を発したというのである。ここで作者芥川は「妙な伝説」という言葉が本当の話であるかのようなことを読者に知らせるために田代君のアイデンティティーを記している。

田代君は私より一二年前に大学を卒業した、秀才の聞えの高い法学士である。且また私の知っている限り、所謂超自然的現象には寸毫の信用も置いていない、教養に富んだ新思想家である、その田代君がこんな事を云い出す以上、まさかその妙な伝説と云うのも、荒唐無稽な怪談ではあるまい。

『黒衣聖母』

つまり、作者芥川は田代君は「謂超自然的現象には寸毫の信用も置いていない、教養に富

5) テキストの引用は『黒衣聖母』『芥川龍之介全集3』ちくま文庫(2009年)に拠る。

んだ新思想家である」ことを読者に強調して「妙な伝説」は実話だということを匂わしているわけである。だが、私が「ほんとうですか」と田代君に問い返すと、田代君は「それはあなた自身の御判断に任せるよりほかはありますまい」と曖昧な態度を見せしている。すなわち、作者芥川はこの観音像に纏わる「妙な伝説」の真偽のほどを読者に委ねているのである。これはあくまでもフィクションであることを読者に告げているわけである。作者としての一種の逃げ口とも言える。言い替えれば、キリスト教に対する芥川自身の皮肉な思想を読者に示すことを避けるための一つの装置とも言えるのである。

3. 祖母の祈りについて

3.1 願がけをしない祈り

先に述べた観音像に纏わる「妙な伝説」というのは他でもない。田代君は「気味の悪い因縁がある」といって自分が観音像を入手した経緯を次のように述べていた。

この麻利耶観音は、私の手にはいる以前、新潟県のある町の稲見と云う素封家にあったので。勿論骨董としてあったのではなく、一家の繁栄を祈るべき宗門神としてあったのですが。

『黒衣聖母』

「妙な伝説」を持っている「麻利耶観音」像は田代君と大学の同期である新潟県の稲見の家にあったものである。が、それは「一家の繁栄を祈るべき宗門神としてあったの」であるという。つまり、稲見家の「麻利耶観音」はキリスト教徒の信じるものではなく、あくまでも一家を守るべき守護神という意味合いを持っているのである。そういった意味で作者芥川は「麻利耶観音」を「家重代の麻利耶観音」としているわけである。また、注目すべきは「妙な伝説」の起きた稲見家の当主も、この伝説の真偽のほどに対しては、自分の母親から聞いたもので「彼自身は勿論そう云う不思議を信じている訳でも何でもありません」といっていることである。すなわち、「妙な伝説」の出所である稲見家の当主や、その当主から「麻利耶観音」を入手した田代君や、「妙な伝説」の一部始終を聞かされた私でさえ伝説を信用しないということである。言い換えれば、「禍を転じて福とする代りに、福を転じて禍とする、縁起の悪い」「麻利耶観音」に信用を置けないということである。この「麻利耶観音」は作者芥川自

身の作品のテーマを生かすための小品に過ぎないということである。したがって、稲見家に起きた「妙な伝説」という不思議な出来事をキリスト教と結び付けて読んでは無理があるということである。稲見家に起きた不思議な出来事は当主の稲見の母親、お栄が十か十一のころの話である。お栄には茂作という八歳の弟がいたが、茂作が麻疹を発病する。お栄の祖母は茂作の麻疹を治すために八方手を尽くしても快方に向かず、却って危篤に陥る始末になる。七十を越した祖母は居ても立っても居られず、夜お栄をつれて土蔵の奥に入って、そこに祭ってある「麻利耶観音」に茂作の麻疹が治るように願いをかけたとある。

祖母はいつもと違って、お栄の泣くのに頼着せず、その麻利耶観音の御宮の前に坐りながら、恭しく額に十字を切って、何かお栄にわからない御祈祷をあげ始めたそうです。それがおよそ十分あまりも続いたら、祖母は静に孫娘を抱き起すと、怖がるのを頻りになだめなだめ、自分の隣に坐らせました。そうして今度はお栄にもわかるように、この黒檀の麻利耶観音へ、こんな願いをかけ始めました。

『黒衣聖母』

ここで注目に値するのは祖母の祈祷は二つの部分に分かれているということである。一つ目は祖母はお栄が「麻利耶観音」を見て「急に怖くなって、しくしく泣き出して」しまったにもかかわらず、「恭しく」祈祷をしたことである。孫娘のお栄が泣くのも構わず、十分間祈りを捧げ続けたという。こういうお栄に対する祖母の態度を作者は「祖母はいつもと違って」と描いている。さらに祖母の祈祷の内容がお栄には「わからな」かったという。これは祖母が無我夢中で祈祷を捧げたことを示している。二つ目はお栄の泣くことを介意しなかった祖母が、十分間の祈祷が終わってからの部分である。祖母は今度はお栄を「しきりになだめなだめ」ており、傍に座らせて「麻利耶観音」へ「願をかけ」ている。最初は願いをせず「御祈祷」をしたのに対して、今度は「こんな願いをかけ始め」というように、具体的な願いを込めて、しかも「お栄にもわかるように」したことである。つまり、一つ目の祈りは一切何の願いもかけない純粋な神への祈祷である。だからこそ「天にも地にも、杖柱と頼んで居たお栄が泣くのも放って置き「恭しく額に十字を切って」専ら祈ったのである。お栄が泣くのを放って置いたのは、他でもない。祖母が一番大事にしていた家族さえも顧みないで、一心に神を崇めたことである。このような祖母の祈り方は聖書にも表れているようなしるべき祈りである。これについてはマタイによる福音書に次のようにある。

あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。

だから、あなたがたはこう祈りなさい、天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように、みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように⁶⁾

つまり、祈る際には具体的に願がけをしなくても、神様はすでに祈る者の事情を察しているから、ただ、神の国のことを祈るべきだといっている。また神様は祈る際には明日のことや世俗のことを心配しないで、

まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分であろう⁷⁾。

といっている。つまり、神様は具体的で、個人の願掛けの混じった祈りは好ましくないとしていることがわかる。こうしてみると、祖母の捧げた10分間の祈りは具体的な願掛けを抜いた、神様の氣に入る祈りだったのである。それゆえ、この時点までは稲見家に何事も起こらずにいたのである。ところが、祖母が願掛けの混じった祈りを始めてからは事態は急変する。

3.2 願がけをした祈り

祖母はお栄を傍に座らせ、切髪の手を下げ、懸命に祈ったとある。

童貞聖麻利耶様、私が天にも地にも、杖柱と頼んで居りますのは、当年八歳の孫の茂作と、ここにつれて参りました姉のお栄ばかりでございます。お栄もまだ御覧の通り、婿をとるほどの年でもございません。もし唯今茂作の身に万一の事でもございましたら、稲見の家は明日が日にも世嗣が絶えてしまうのでございます。そのような不祥がございませんように、どうか茂作の一命を御守りなすって下さいまし。それも私風情の信心には及ばない事でございましたら、せめては私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし。私もとる年でございすし、靈魂を天主に御捧げ申すのも、長い事ではございますまい。しかし、それまでには孫のお栄も、不慮の災難でもございませなんだら、大方年頃になるでございましょう。何卒私が目をつぶりますまででよろしゅうございますから、死の天使の御剣が茂作の体に触れませんよ

6) マタイによる福音書第6章6~10節 聖書『日本聖書協会』(1994年)、p.8

7) マタイによる福音書第6章33~34節 聖書『日本聖書協会』(1994年)、p.9

う、御慈悲を御垂れ下さいまし。

『黒衣聖母』

祖母の祈りを長々と引用したのはほかでもない。稲見家に起きた災難と深く結び付いているからである。祈りの要点を摘んでみると、茂作の病気が治ることであるが、そこには相当の問題点が見られる。まず、祖母の祈りには具体的な事情と期限と条件がついているし、祈祷の効験を疑って神様を信じきっていない祖母の信仰心が見え隠れする。これは祈りの最初から「私が天にも地にも、杖柱と頼んで居ります」対象が神様ではなく、孫と孫娘と告げていることからわかる。また、茂作の病気は「神の国と神の義」の為ではなく、稲見家の世継ぎの為だと祈っている。言い換えれば、「神の国と神の義」の為ではなく、稲見家の家柄と跡目の為の祈りである。しかも、祖母は「私風情の信心には及ばない事でございましたら、せめては私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし」と祈っている。これは祖母自身の信心を託つけにして神様を試しているのである。これは神様への祈りというよりは、神様と取り引きをしていると見て差し支えないのである。祖母の祈りの中身は只管に稲見家の存続と茂作の快癒のことばかりである。しかも、そこには神様と取引を行う祖母の態度も垣間見られるのである⁸⁾。神様はこのような信心を持つことについて弟子たちを戒めていたのである。このことはルカによる福音書によく示されている。

イエスに従う者が、イエスに従う前に先ず、自分の「父を葬りに行かせてください」と言ったが、イエスは「その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい。あなたは、出て行って神の国を告げひろめなさい⁹⁾。

と言っている。また、もう一人が「主よ、従ってまいりますが、まず家の者に別れを言いに行かせてください」と言ったのに対して、イエスは「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである」と言っている¹⁰⁾。つまり、祖母の信心と祈り方は神様の教えには相応しくないものである。相応しくない信心を持っていたからこそ稲見家の災難は起きる蓋然性を孕んでいたのであろう。

8) 祖母の祈りについて小谷瑛輔(2014)は「『黒衣聖母』の祖母の祈りは、「福」へと結びついたのか「禍」をもたらしたのか、単純に決定しがたいところがあり、肯定や否定として関係付けることには慎重になる必要がある」といっている。「黒衣聖母」—新潟の宗教的思考と松岡譲『芥川龍之介と切支丹物』翰林書房、p.256

9) ルカによる福音書第9章59～60節 聖書『日本聖書協会』(1994年)、p.104

10) ルカによる福音書第9章61～62節 前出『聖書』、p.104

4. 稲見家の災難について

祖母の祈りが終わった際に「麻利耶観音」の表情が微笑を含んでいたようであったという。

その言葉が終わった時、恐る恐る顔を擡げたお栄の眼には、気のせいかな麻利耶観音が微笑したように見えたと言うのです。お栄は勿論小さな声をあげて、また祖母の膝に縋りつきましたが、祖母は反って満足そうに、孫娘の背をさすりながら、「さあ、もうあちらへ行きましょう。麻利耶様は難有い事に、この御婆さんのお祈りを御聞き入れになって下さったからね。」

『黒衣聖母』

お栄は「麻利耶観音」の微笑を見て驚き、声をあげ祖母の膝に縋ったとある。なお、祖母はその微笑を「お祈りを御聞き入れになっ」と思って満足しそうになったとある。では「麻利耶観音」の微笑の意味は那邊にあるのか。一応神様は祖母の祈りに応えたと見える。茂作の病気の様子を次のように伝えている。

明るく日になって見ると、成程祖母の願がかなったか、茂作は昨日よりも熱が下って、今まではまるで夢中だったのが、次第に正気さえついて来ました。この容子を見た祖母の喜びは、仲々口には尽せません。何でも稲見の母親は、その時祖母が笑いながら、涙をこぼしていた顔が、未に忘れられないとか云っているそうです。

『黒衣聖母』

ところが、祖母の喜びは長くは続かない。それはたった二十四時間あまりだったのである。祖母は祈りを捧げた翌日に茂作の介護の疲れで横になったまま息が絶えていたとある。と同時に「十分ばかりの内に」茂作も死んでしまったというのである。つまり茂作の病気は治ったものの、それはあくまでも祖母の「目をつぶりますまで」であったのである。言い換えれば、祖母の期限と条件付きの祈りに対して神様はそれに相応して聞いてあげたのである。すなわち、祖母の存命の間までは茂作の命を生かして置いたのである。つまり、祖母の「麻利耶観音」の表情が微笑を含んでいたことは、祖母の信仰に問題があったことを示している。「麻利耶観音」の表情が微笑を含んでいたということは、ほかでもない。「麻利耶観音」は祖母の自身の家と孫の病気ばかりを祈る信心について微笑を含んで優しく諭していたのである。キリストは弟子たちに、

だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう¹¹⁾。

といていたのである。つまり、芥川は祖母の歪んでいて間違っていた信仰を「麻利耶観音」を通して皮肉っているのである。

5. おわりに

物語は私の「麻利耶観音」に対する感想を述べながら結ばれる。

私はこの運命それ自身のような麻利耶観音へ、思わず無気味な眼を移した。聖母は黒檀の衣を纏ったまま、やはりその美しい象牙の顔に、ある悪意を帯びた嘲笑を、永久に冷然と湛えている。

『黒衣聖母』

つまり、私は「麻利耶観音」の微笑を「ある悪意を帯びて」また、その微笑を「永久に冷然と湛えている」ものとして見ている。「麻利耶観音」を基督教の神的な存在ではなく、皮肉を込めた物語での一つの材料や小品として見ている。すなわち「麻利耶観音」は物語での小道具として扱われているのである。これはそのまま作者芥川の「麻利耶観音」に対する見方である。芥川はキリスト教について「ある鞭」で 次のように述べていたのである。

基督教的信仰或は基督教徒を嘲るために屡短編やアホリズムを草した。しかもそれ等の短編はやはりいつも基督教の芸術的莊嚴を道具にしていた。即ち僕は基督教を軽んずる為に反って基督教を愛したのだった¹²⁾。

つまり、芥川は基督教を自分の作品の道具立ての一つとして扱っていたのである。また、「麻利耶観音」を「ある悪意を帯びた嘲笑を、永久に冷然と湛えた」ものとして描写したことも¹³⁾、芥川の初期作品に属する『煙草と悪魔』(大正五年)の『悪魔』と繋がっている。こ

11) マタイによる福音書第16章24-25節、前出『聖書』、p.26

12) 「ある鞭、その他(仮)」『芥川龍之介全集第23巻』岩波書店(1998年)、p.221

13) 海老井英次(1979)「黒衣聖母」『芥川龍之介必携』学燈社に「麻利耶観音」の嘲笑について「絶対、永遠と

のことについて西谷博之は「悪魔」について次のように述べている。

(前略)「その悪魔なるものは、天主教の伴天連が(恐らくは、フランス上人が)はるばる日本へつれて来た」悪魔であって、キリスト教の本質ある愛を実現する善と対立する悪魔ではない。南蛮趣味、ひいてはエキゾティシズムの対象としての悪魔である。『尾形了齋覚え書』における基督教も同じである。基督教は邪法であり魔法である¹⁴⁾。

つまり、『黒衣聖母』に登場する「麻理耶観音」も『煙草と悪魔』での悪魔のように「南蛮趣味やエキゾティシズムの対象として」扱っていたのである。芥川は稲見家の「麻理耶観音」を以て人間の力を超越した皮肉で可笑しな運命を披瀝しているのである。

【参考文献】

- 清水康次(1985)『芥川竜之介事典』明治書院、p.188
 西原千博(2003)『芥川竜之介新辞典』翰林書房、p.204
 中田和隆(2000)『芥川竜之介全作品事典』勉誠出版、p.184
 野田康文(2002)『芥川竜之介大事典』勉誠出版、p.461
 西谷博之(1985)『芥川竜之介事典』明治書院、p.151
 『芥川龍之介全集第23巻』岩波書店(1998)、p.221
 小谷瑛輔(2014)『芥川龍之介と切支丹物』翰林書房、p.256
 海老井英次(1979)「黒衣聖母」『芥川龍之介必携』学燈社、p.106
 「黒衣聖母」『芥川龍之介全集3』ちくま文庫(2009)
 聖書『日本聖書協会』(1994)、p.8

논문투고일 : 2020년 04월 01일
 심사개시일 : 2020년 04월 17일
 1차 수정일 : 2020년 05월 08일
 2차 수정일 : 2020년 05월 15일
 게재확정일 : 2020년 05월 20일

か<彼岸의>なものを人間に従属させたと思った(錯覚した)とき、人間が陥る悲喜劇を祖母は演じたのである。<神聖なる愚人>以外、<宗教的感動>を体することはできない。黒衣聖母の<嘲笑>の意味するところはそうしたことであったろうという説明もある。p.106

14) 西谷博之(1985)『芥川竜之介事典』明治書院、p.151

＜要旨＞

『黒衣聖母』論

金熙照

本作品は芥川龍之介の所謂切支丹物に属する短編である。物語は黒檀を刻んだ麻利御観音にまつわる稲見家の伝説という形で運ばれている。芥川は物語の中で聖母麻利御をキリスト教における聖なる存在ではなく、意地悪そうなものとして書き変えているのである。つまり、彼はキリストを神としてではなく、物語の小道具として使っている。芥川は稲見家の「麻利御観音」を以て人間の力を超越した皮肉で可笑しい運命を披瀝しているのである。

A study on Akutagawaryunosuke's "Kokuiseibo"

Kim, Hee-Jo

This work is a short story which belongs to Akutagawa Ryunosuke's so-called Christian in feudal Japan thing. A story is carried by the shape as the legend of Inami family who concerns the Mari ya Kannon who cut an ebony. Akutagawa is rewriting Holy Mother Mari ya as something to seem mean, not Christian holy existence in the story. In other words, he can peep at using Christ as tools of a story, not a god. Akutagawa has an ironic and mysterious destiny that transcends the power of human beings with the Inami family's "Maria Kannon".